〈講演会〉

近衛篤麿と清末中国

中央大学法学部教授　李　廷江

【司会】 皆さんこんにちは。ようこそいらっしゃいました。只今より李廷江先生の講演会を始めさせていただきます。まず愛知大学東亜同文書院大学記念センター長の藤田佳久先生のご挨拶がございます。よろしくお願いいたします。

【藤田】 あらためまして皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました愛知大学東亜同文書院大学記念センター長をやっています藤田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。実は今回昨日に次いで2日目なものですから、昨日もご挨拶をいたしました。もうお聞きになった方は同じ話だなと思われるかも知れませんが、今日初めての方もおられると思いますので、我々の記念センターのことに関して少しだけご紹介させていただきます。

愛知大学が東亜同文書院を継承する形でスタートしましてもう60数年、書院の歴史から言いますと100余年を経過しております。愛知大学としましては東亜同文書院の歴史をうまく踏まえて発展させたいということで、今から15～16年前に東亜同文書院大学記念センターというのを愛知大学の中に設けました。現在は展示等も揃っております。今日はこちらのほうに展示もございますので、もうご覧になっていただけた方もおられると思いますけれども、それ以外の諸資料も大学のほうで展示をしております。いろいろな経過がございまして、こちらの展示は、書院の卒業生で孫文の秘書をやっておられた山田純三郎という方のお子さん（順造さん）が、ご自分でお父さんの遺志を次いで孫文の記念館を作ろうというご意思をお持ちだったんですが、お体を悪くされて遺品を愛知大学のほうへ寄託していただいたわけです。最初はそれを中心に、書院の歴史も含めて展示をいたしました。

こういう展示中心の施設としてやってきましたが、昨年文科省からオープン・リサーチ・センターという新しいプロジェクトに選定され、かなり大きな財政的援助をいただきました。昨年から5か年の計画で、我々の東亜同文書院大学記念センターの内容を広く多くの人に知ってもらおうという事業展開を始めました。今年で2年目です。昨年はこういう展示関係ですと学内あるいは地元の地域ではいろいろやっていますが、学外では横浜で日本全体の図書館展というのがあり、その中に初めて大学として参加するプランがあって、それを実施いたしました。2万人を超える多くの方々に東亜同文書院を知っていただいたという経過がございます。

今年は霞山会のご好意によりまして、こちらでこういう展示と講演会を開くことができました。きっかけはそれより前霞山ビルの中にございました愛知大学の東京事務所と併せて今度移ってまいりました。そのオープニング・セレモニーが昨日ございましたけれども、それと併せてこちらで広く皆さん方にも知っていただきたいという我々センターの計画が、こういう形で実現いたしました。

学外でのプランは、このあと来年福岡で実施いたします。九州の方々が書院の卒業生にたくさんおられ、要望が非常に強いものですから。再来年は、我々のキャンパスは3つございますが、そのうち名古屋の都心にある車道校舎で。そして最後の年はまだ具体的ではありませんが、京都か神戸で実施したいと思っております。

こういう展示施設、啓蒙的な施設あるいは活動の他に、さらに東亜同文書院の多面的な性格を総合的に研究していこうというプロジェクト、それから東亜同文書院の歴史を継承した形で愛知大学が終戦直後に豊橋でオープンしましたので、愛知大学史のほうもそういう観点から研究をしていこうということで、研究部門も併せてスタートしました。もちろんその前から実際は進んでおりますけれども、本格的にその2つの研究も進展させようということで現在ここに来ております。先ほど申しましたように今年が2年目で、夏休み前の7月には中国の研究者の方々と我々との合同で、東亜同文書院を日中の研究者がどういうふうに見ているのかという、総勢10人ほどのシンポジウムを、朝から丸1日かけて実施いたしました。再来年には今度は欧米の研究者が東亜同文書院をどういうふうに見ているのかという形でシンポジウムをしていきたい、あるいは国内でのシンポジウムもまた来年やりたいということで、かなりいろいろ盛り沢山の事業計画を持っております。そういう点では、内輪の話をしますと大変忙しい毎日を過ごしております。我々の活動をぜひご理解いただき、この機会に東亜同文書院そして我々愛知大学の存在も認めていただけるようにお願いできたらということでございます。

今回は昨日に引き続きまして、ちょうどこの霞山会の実質的なスタートである明治30年代に、近衛篤麿公（東亜同文会の会長になられ、東亜同文書院の発足に非常に強く影響のあった方です）が果たしたいろいろな歴史的役割がございますが、研究をされている方はそんなに多いわけではございません。その中で今日は中央大学の李廷江先生にお願いして、近衛篤麿公を中心として当時の清朝の政治状勢との絡み、アジアの中での近衛篤麿公、霞山会、東亜同文書院、その辺のお話を総合的にお聞きしたいと思い、こういう催しを計画いたしました。李先生につきましてはお手元に少しご紹介がございますが、馬場先生のほうからまたご紹介をしていただく予定です。1時間半ほどの予定をしております。そして時間的に余裕がありましたら皆さん方からのご質問等も受けていただけるということですので、お尋ねになりたい方はよろしくお願いいたします。そういうことで簡単ですけれども、私のご挨拶とさせていただきます。

【司会】 ありがとうございました。では続きまして愛知大学現代中国学部長であり愛知大学東亜同文書院大学記念センター運営委員でもいらっしゃいます馬場毅先生より、李廷江先生のご紹介がございます。馬場先生よろしくお願いいたします。

【馬場】 馬場でございます。よろしくお願いいたします。李廷江先生と私は20年来の知り合いでありまして、お互いに若いうちからいろいろ勉強し合った仲間です。それで今日はご紹介をさせていただきます。李先生は現在、中央大学法学部教授を務められています。元々は中国の名門校清華大学をご卒業後、中国社会科学院にお進みになりました。中国社会科学院は皆さんご存じのように、中国政府のシンクタンクの役割を果たしているわけですが、そちらのほうにお進みになったあと、先ほどお聞きしましたら1982年に日本にいらっしゃいまして、その頃私は初めて李先生にお会いしましたが、その時から大変流暢な日本語を話されておりました。日本の習慣なども非常によくご存じでした。私がお会いした時は東大の大学院で博士論文の準備をされていたと思います。東京に辛亥革命研究会（つい最近まで活動していましたが今は活動を停止しています）というのがあ

り、これには辛亥革命史研究で有名な久保田文次先生、藤井省三先生、中村義先生、野沢豊先生（中国では俗に「辛亥研の四人組」と言っております）等、辛亥革命の指導的な役割を果たされた有名な先生方の下に組織されたものです。元々は東京教育大学を土台にしていましたが、東京都内の各大学の研究者および中国・台湾・欧米の研究者も参加された国際的な規模の研究会でありました。そこに李先生も参加され、その時に私が初めてお会いしました。

東京大学での卒業論文は「辛亥革命における日本財界と大陸浪人」です。特に李先生は特色として孫文を支援した財界人、あるいはいわゆる大陸浪人と言われる人達（この中には山田兄弟も入るかと思います）を研究されており、そちらのほうについては中国の方の研究は非常に少ないと思います。例外的に南開大学の兪辛淳先生が、そういった支援をした日本人のことを中国で研究なさっています。それと同じように辛亥革命を支援した日本財界人と日本浪人について、これは日本側の研究はかなりあるわけですが、中国の先生でやっている方は非常に少ない。そこに李先生の研究の大変ユニークな点があるかと思います。

そこに書いてありますように、学習院大学東洋文化研究所客員研究員を経て、亜細亜大学専任講師におなりになりました。その間アメリカ合衆国ハワイ東西センターの客員研究員とかハーバード大学ライシャワー日本研究所客員研究員、中国社会科学院近代史研究所客員研究員などをお務めになって、中央大学に行っておられます。最初から法学部にお勤めでした。専門は近現代日中関係史となっておりますが、今申し上げましたように、特に孫文なんかを支援した財界人、あるいは大陸浪人、それから財界人も必ずしも純粋な革命支援というわけではなく、そこにおける財界の利害、あるいは日本政府の利害を背景にして支援するわけですけれども、それに対して孫文は、昨日若干出ていましたが日本から借款を引き出すために、非常に微妙だと思うんですけれども中国側の一部利権を提供するようなことも言っている。そういう先端的なところを資料の裏付けを具えて研究されています。

最近のご著書に『日本財界と近代中国——辛亥革命を中心に——』というものがあります。日本外交史料館の外交文書等を豊富に駆使された、大変実証的かつ立派な本だと私は思います。愛知大学に『中国21』という雑誌がございますけれども、そこにも李先生のこの本の書評のバックナンバーが載っておりますので、もし『中国21』をご講読でしたら見ていただければと思います。

最近は近衛篤麿に研究の中心を移されているようでありまして、例えば衛藤瀋吉先生監修による『近衛篤麿と清末要人——近衛篤麿宛来簡集成』という資料集とか、また論文では「日本軍事顧問と張之洞」。清末の有名な洋務派官僚である張之洞、これに対してはかなり日本の顧問が招請されて行っております。それについての研究。あるいは孫文が臨時大総統になった時の日本人顧問等をお書きになっています。その他に桜田会金賞等を受賞なさって、その研究の価値については日本内外で大変定評のある先生です。私としては李先生をここにお迎えすることは大変喜びでもあり、光栄でもあります。ということで私のご紹介を終わらせていただきます。

【司会】 ありがとうございました。ではさっそく李廷江先生のご講演に移らせていただきます。李先生よろしくお願いいたします。

【李】 ただいまご紹介いただきました李廷江と申します。馬場先生から過分なご紹介をいただき恐縮です。講演会にお招きいただき大変光栄に存じます。実は、昔からいろんな意味で私は霞山会、愛知大学と縁を持っているのではないかと思います。博士論文を書くとき、愛知大学に何回も足を運び、孫文と日本関係の資料を調べました。それ

から、つい最近出された『近衛篤麿と清末要人』という本を編集する際に、霞山会に多大なご協力とご便宜をして頂いたのであります。今日は皆さんに「近衛篤麿と清末中国」に関するお話ができることも、ある意味では霞山会、愛知大学、また近衛篤麿のおかげだと思っています。これから、私はこれまで勉強してきたことをまとまった形で、皆さんにご報告したいと思います。

先ほどのご紹介にもありましたように、私は近衛篤麿研究の専門家ではありません。従って、近衛篤麿の生涯とその功績を語る資格もありません。今日は、近衛篤麿と清末中国を中心に、私なりの史料解釈と感想をお話しいたします。近衛篤麿について、自伝はじめいくつかの研究がありますが、近衛篤麿と清末中国について纏まったものは案外に少なかったのです。私は近衛篤麿から清末中国の要人たちに宛てられた書簡を中心にまとめた本、『近衛篤麿と清末要人』を出版しました。私の関心は、清末中国との関係で近衛篤麿がいったいどのように考え、具体的になにをしたのか、あるいはしようとしたのかということであります。つまり、清国との関係を通して人間近衛の思想と行動を考え、それを通して近代日中関係の知られざるもうひとつの側面を明らかにしたいと思いました。

近衛篤麿と清末中国を検討するに当たって、まず20世紀初頭、中国、朝鮮、東アジアで広く知られ、巨人と言われる近衛篤麿のことについて、なぜか長いあいだ忘れられていたという事実を検証しなければなりません。また同時代を生きる彼等にとって、日本、中国および東アジアのイメージとその内実を説明しなければならないと思います。さらに近衛篤麿と親交のあった中国人の政治的立場、思想的傾向および対日認識・対日政策を解明する必要もあります。近衛篤麿といえば日本の貴族であり、若い頃から日本政界の重鎮となり、日本社会の中心人物でありました。その彼はどういう経路を通して中国情報を収集していたのか、どのように中国を認識していたのか、そして日本の対中国政策にどのような影響を与えたのかを理解するには、まず近衛篤麿をめぐる日本人のことに触れる必要があります。

繰り返すことになりますが、私はこういうような話をするのは近衛篤麿と清国との関係を明らかにし、近代日中関係史において忘れられた一面を解明しようとするためだからです。そして近衛篤麿を検討する事は現代に生きる我々にとっていったいどういう意味があるかを考えてみたいと思います。日本に来てもう25年になりますが、この新しい霞山会館はもちろん初めてです。隣の霞山会館を最後に伺ったのは1989年6月の天安門事件後、ある座談会に呼ばれて以来18年ぶりで、感無量です。

では本題にはいります。近衛篤麿といえば清末中国では官民を問わず非常に著名な日本人で、清朝王族を始め、有名な張之洞、劉坤一、康有為、梁啓超、孫文からも大変尊敬されていた日本を代表する人物だったといえます。例えばこういう資料があります。1901年2月、南京総督の劉坤一は近衛と会ったあと、深い感銘を受けて、駐日大使李盛鐸宛に送った手紙の中で「近衛の風貌と巨論を伺い、実にアジアの巨人である。今は同盟会長として、中国と連絡し、遼を保全しようとするから、その後についていかなければならない」と高く評価しました。当時は、「偉人」や「偉大な人物」という言い方は決してよく使われる言葉ではありませんでした。しかし、近衛については、「偉人」だけではなく、「東亜の巨人」であると劉は見ていたわけで、近衛篤麿が近代日中関係においての重要性を物語った証言でありましたが、これほど重要な人物は、戦後の日本では忘れられました。日本人研究者の江原さんは、その理由を戦後日本学界の傾向に関連していると指摘されましたが、その通りだと思います。その1つは、東亜同文書院に対する評価と関連していると思います。確かに歴史は多面性を持つもので、光と影の両方

があるのは歴史です。人間に限界があり、時代にも限界があります。時代の変化は、まさに天気の変化のように、昨日は大雨だったが、今日は快晴というようなものであります。そういう視点から歴史を考えると、時代に左右されずに、歴史の事実を一つ一つ解明する作業には大いなる意味があります。そういう意味で、近代日中関係において近衛篤麿の位置づけと彼の果たした役割を解明することは大変必要であるといわなければならないと思います。

それからもう1つ、歴史を勉強する意味と目的は、歴史そのものを知ることにより歴史の発展に積極的な役割を果たした側面をいかに継承するかということにあると、私は思います。そういう意味で、歴史を再構築する仕事は、我々歴史研究者に与えられた責任ではないかと痛感しております。私自身は近衛篤麿と清末中国との関係を明らかにし、語る責任を痛感して、この演壇に上がってきたわけです。

では、3つ目の問題になりますが、なぜ今近衛篤麿なのかということです。こういう局面を切り開いたのは、先人達の耐えない努力、あるいは近衛篤麿の研究者達の研究功績のおかげだと私は理解しております。お名前を一つ一つあげることができませんが、**工藤武重**さん、**栗田尚弥**さん、愛知大学の藤田先生など。これらの先人たちの努力により、今まで見過されてきた歴史を再現できたわけです。さらに深く考えれば、究極のところ今日の近衛ブームも、今日のような講演会も、近衛篤麿が残してくださった遺産によるものであります。やっぱり彼は歴史上の偉大な人物であり、近代の東アジア歴史の中で大きな仕事を成し遂げた人物であるに違いありません。彼の思想と行動には21世紀を生きる我々に示唆する部分が多く、彼の残された遺産を我々は継承すべきものが少なくなかったからであります。そういう意味で、今我々が近衛篤麿とその時代を研究し、理解することは、近代日中関係史における歴史遺産を再検証することになるといえます。

ご周知のように近衛が成し遂げた事業の1つは、東亜同文書院を作ったことです。先ほど藤田先生は、100年の歴史を持つ東亜同文書院の卒業生たちがいつも時代の最先端を走っていたからこそ、近衛篤麿が現在の我々に知られるようになったのではないかと指摘なさいました。しかし、先ほど申し上げましたように近衛篤麿に関する研究はあまり多くはありません。私の知っている資料は『近衛篤麿日記』全6巻と、**工藤武重**先生が書かれた『近衛篤麿公』です。そこから私は年表を作りました。僅か41年の生涯のなかで近衛は精力的に日記を書きました。陽明文庫に保管されている実物を閲覧するときに、これほど細かく日記を書いた近衛の心情を想像してみましたが、やはり歴史を作る人間としての責任に駆り立てられたこと、および歴史を残すべきだという使命感があったからではないかと思いました。近衛篤麿と中国との関係およびアジアと関係を持つようになったのは、亡くなる前の6年から8年ぐらいでしたが、2千数百頁を越えた日記の中で、中国に関する記述が9割以上を占めています。中国との関係は、彼の人生の中で如何に大きかったかを物語っています。

近衛が一挙に有名になったのは、1898年1月の雑誌『太陽』に「同人種同盟　附支那問題研究の必要」と題する論文を発表したことによったものでした。それは8年間にわたる近衛篤麿の東アジア問題に関与した歴史の始まりでもありました。

近衛篤麿と清末中国を理解するために、まず19世紀末の日本と中国について、4点挙げてお話いたします。1、列強の中国における争奪戦という状況であります。ご承知のようにアメリカの門戸開放・機会均等主義により、中国が次第に西欧諸列強の争奪の対象になりつつありましたが、日本を初め、各国の思惑は決して一様ではありませんでした。中国争奪の主要な場所が2つあります。

1つは東北地域であり、もう1つは揚子江流域であります。この2つの地域に対しては、イギリスは揚子江流域を何とか自分の勢力範囲におさめたかったのですが、しかし日本が入ってきたため、日英の競争が始まったのであります。他方、東北（満州地域）ではロシアの進出に強い危機感を覚える日本は、ロシアとその後日露戦争にまで発展してきたわけですが、このような列強の中国争奪図式の中では、主役である中国そのものが全く無視された存在になったわけです。

では、その頃の中国人の日本認識を見ましょう。日清戦争後の中国では、敗戦の記憶を拭い去り、何とか国を再建したいとする様々な政治勢力の登場によって国内政治が混乱きわまる状況下にあったため、諸列強の攻勢に対応し切れる危機状況を打開できるような力がありませんでした。1898年、上からの改革として戊戌維新が勃発しました。上からの改革だったわけですけれども、その時の日本に対する見方・認識は様々あったわけです。1つは改良派の日本モデル論。改良派とは、光緒帝に協力する康有為と梁啓超たちのことです。彼等は黄遵憲の『日本国志』を光緒帝に紹介し、戊戌維新の時に光緒帝に提出した100も超えた改革案に、日本のことをたくさん盛り込んだのです。要するに日本をモデルとして我々は改革すると。日本が中国と戦って勝った理由が明治維新にあり、改革にあったから、我々も強くなるためには日本のような改革を決行しなければならないと主張しました。この改革は、結果的には失敗しました。その後、二人は日本に亡命してからも、東京で改革を呼びかけ、光緒帝を支持する新聞雑誌を発行して、日本に学ぶ運動を起こした。1899年、康有為の学生である梁啓超は「日本文を学ぶ利益を論じる」を発表し、「来日して数か月、日本文を習い、日本の書物を読んだが、以前見られなかった書籍を目にすることができ、以前極められなかった理論も展開することができた。幽室に日を見、乾いたのどに酒を得た如く、私には大変嬉しかった。しかし、これを私有せず、同志に大声で告げたいと思う。即ち、我国の人で進学に志すものは日本文を学べ」と、日本語を学ぶ必要性を説明しながら、「日本と我々は唇歯兄弟のような国であって、境をなくしともに手をとりあってこそ、黄種の独立を保全し、ヨーロッパ勢力の東漸を防ぐことができるのである。他日、中日両国合併という局面を迎えるようなときには、言葉の疎通ということが、実に連合にあたっての最重要課題となるだろう。」と、言葉の勉強を通して日中連合の将来を予想していました。また革命家の孫文は、違う意味で日本を好意的に見ていました。ご承知のように、辛亥革命が勃発するまで孫文を指導者とする革命派は、清朝を打ち倒すべく、多くの日本人の協力を得て日本を海外での根拠地として中国国内で実行する革命を準備していました。孫文は、14回ほど日本を訪れ、長期的な亡命と短期的な訪問を合わせて、通算10年近く日本に滞在していました。孫文は「日本維新の政治はまだ日が浅いのに、今日の成功はすでに多いに見るべきものがある」と指摘し、「30年前に日本がその国を変革したのと同様な仕方において、中国を変革しよう」と呼びかけていました。このことを我々は孫文自身の回想から確認できます。

実は以上の改革派や革命派と異なり、清政府の指導者たちは政権を維持させるために、戊戌維新に提起された日本経験を生かして国内改革を真剣に考えていたことが、最近の研究で分かったのであります。それにはいくつかの理由があります。1つは日本側からの働きかけがあったこと。もう1つは内政の面でこれまでの反省も含めて、明治維新以来の日本を評価すべく、学ぶべきであるという認識があったこと。3つ目は対外的に列強に対抗するには日本と連繋する必要があると考えていたことであります。要するに、19世紀末の中国において日本のイメージは、明治維新の影響、日清戦争敗戦の衝撃、日本側からの働きおよび中国国内の様々な動きが複雑に絡みあっていたた

め、多元的なものでした。多くの研究で立証されたように、西太后によって推進されていた清末新政は、本質的は日本をモデルとする改革でありました。

大日本帝国のアジア政策について、ここで日本のアジア政策は一体どのようなものであったかを見てみましょう。レジメでは、アジア政策を極力に推進していった3つの主要な勢力を挙げています。もちろん、実際には3つだけではなく、もっとたくさんあったかと思いますけれども。第1のグループは大陸浪人である。大陸浪人といっても様々なタイプの人がおります。中国革命を無条件に援助する梅屋庄吉、宮崎滔天のようなタイプもありましたし、軍部に依頼され、中国の南方を拠点として積極的に情報活動を展開していた宗方小太郎もいました。宗方の持論は中国を分割すべく、少なくとも北京以外に南方と北方において1つか2つの独立国を作るべきだと考えていました。第2のグループは軍部であります。軍部といえば参謀本部を中心としていました。当時の作戦課長は宇都宮太郎で、故日中友好協会会長であった元参議院議員宇都宮徳馬先生のお父さんに当たります。陸軍を知らないと明治日本の動きが分からないといわれておりますが、宇都宮太郎の関係資料を調べてみたらその通りだと確認しました。彼は典型的な明治軍人で、典型的な日本主義者でありました。彼は明治29年8月12日から12月7日にかけて上海、福州、厦門(アモイ)などを視察しましたが、その目的は「他日東方経綸の目的を以て清韓両国に於いて帝国のまず第一に占領し置かる可地点の研究」にあると明記されていました。その後、宇都宮は「清国に対する回解」(対清策)の中で「清国における現在の統治機関は今や殆ど全然無能力にしてそれが使用に供すべき諸資料亦殆ど空乏なり」としながら、清朝の地方政治を領域分けで『満州、本部支那、蒙古等の地』の三大地域と類別していた。陸軍は日本のアジア進出を計画するときに、早くから中国を分割に統治する構想を打ち出した、そういうような一面がはっきりと出てきました。中国を分割しようという考えは宗方小太郎によって生み出されわけで、即ち、中国南方、揚子江流域の地域に実権を持っている張之洞・劉坤一等と協力して新しい政権を作ろうという動きでありました。

第3のグループは外務省でありました。日清戦争後、日本政府内に日英同盟か日露同盟かをめぐって意見の対立がありました。その中で英国との同盟を主張し、堅持したのは、中英国公使の加藤高明でした。1898年6月30日、第一次大隈内閣が誕生したことにより、日英同盟はいっそう現実的になってきました。8月17日、外務大臣兼任の大隈重信は、ロンドンの駐英国公使の加藤高明宛に日英同盟を進めていく指示を出しました。この文書の中で「清国の独立を維持するため最も重要な方策の一つとして同国陸海軍を当世式にて改善するの必要なる論を俟たずして明らかなり、而して日本帝国が陸軍の改善に英国が海軍の改善に助力するを以て適当なりと信ず故に(中略)即ち張之洞は已に日本人陸軍顧問および教師を招聘し又多数の清国陸軍生徒を日本国へ留学せられたき旨を申し出て帝国政府の承諾を得たり総理衙門も又陸軍生徒派遣の計画中なり」と書いてありました。「大隈重信書簡」は、清国の軍事改革に協力することによって、日本とイギリスは同等の立場を得ることができるとともに、中国の軍人・学生・有力者の中で親日勢力を扶植しようとする一石二鳥の思惑を込めたものでありました。

当時の日中関係は非常に流動的であり、その特徴をいくつか挙げてみることができます。1つは日増しに拡大しつつある交流。政治・経済・文化・教育などいろんな分野で、官から民までの交流が非常に早いスピードで進んでいました。現在の言葉でいうと、人・物・情報・金がものすごいスピードで流通していた実態です。これは良い面といえばそうですけれども、しかし日本では日清戦争の勝利により、日本はアジアの盟主としての役割を

果たすべきである、というような気持ちが非常に強くなったわけです。例えば、明治28年に発刊した雑誌『太陽』の発刊趣旨は、次のように書かれていました。「日清戦争の勝利により、これまで欧米列強に無視されていた日本は、世界の日本として見られるようになった。しかし、我国の進歩は単に陸海軍に限らない。技芸や生活は、欧米諸国を凌駕するほどのものがある。しかるに国民であっても自己の文明進歩の真相を知るものは少なくないゆえに、自己を知ると同時に、世界に知識を求めることも為さねばならない。」。従って、『帝国の栄誉を発揚するの雑誌なきを慨し、特に深く今日の盛挙に関するあり、によって全力を太陽に注ぎ、帝国未曾有の大雑誌とし、以って帝国の名誉を中外に宣揚せんと欲するのである。』というようなことを考えていたことが分かります。明治31年6月に日本人の主導により上海で亜細亜協会設立大会が開催されました。当時、日中交流史上まれに見るたくさんの中国人が日本の学校に入り、日本の士官学校でも大勢の中国人軍事留学生が勉強していました。このような状況の下、日本はアジア盟主としての自負と使命を持つようになりつつあると共に、社会的にはかえって中国や朝鮮に対し、傲慢と軽蔑の風潮が生じつつありました。例えば陸軍士官学校で勉強している若い学生が、ある偉い人の息子に捕まれてしまった。「お前達がここに来たのは何の意味もない。単なる我々の遊ばせる対象だ」と言って、夜中にこの中国人留学生を連れ出していたずらをしようとしました。事件を知った中国人学生が全員怒って学校当局に訴えたけれども、結局この日本人は全く処分を受けませんでした。このような差別や侮辱を受けたのは、当時では少数ではなかったようです。ですから、当時一部の学生が「中国人留学生が日本でこんな差別を受けながら勉強するのは意味がない。アメリカに行くべきだ」と提案しました。それに対し、「やはり我慢して日本で勉強して中国をよくすべきだ」と大勢の学生は考えていたようです。この種の苦悩は多くの留学生の回想録に残されています。

明治31年1月に発表された「同人種同盟　支那問題研究の必要」の冒頭に、日本社会に氾濫している中国蔑視の風潮に痛烈な批判を加えた内容が書かれています。「近時日本人は戦勝の余威によりて漸く驕慢の心を長じ、支那人を軽侮すること益々太甚しく、特に支那の各地に居る日本人は恰も欧州人の支那人に対する如き態度を以て支那人を遇し、以為らく、日本は東洋における唯一の文明国なり、支那の先進国なりと。夫れ文明の制度を布き、文明の教育を施したるに於いては、日本実に支那の先進たり。故に支那を開導して之れを扶植するに文明を以てするは大に善し。独り其先進国たるを以て悻々自ら喜び自ら負ひ、支那人を軽侮し戮辱して反って其悪感を買ふは、啻に先進国の襟度に戻るのみならず、対清政略の運為を妨ぐこと極めて大、其禍を後来に遺こす、豈勘少ならむや。」。ですから、ここまで説明した19世紀末の日本と中国の状況は、まさに近衛篤麿の思想背景でもあるといえます。このような中国蔑視という問題に対して、日本政府も軍部も憂慮して何度も注意しました。しかし、事態は一向に改善されていなかったのです。近衛の文章を読めば分かるように、日本で蔓延している中国蔑視の風潮は、結局日本の対中国政略に悪い影響を与えるしかないという指摘が、極めて大切なポイントではないかと思います。あるいは、それこそが彼のアジア問題に対する関心の原点ではないかと私は考えています。

もちろん、生い立ちや青年期の外国留学も、近衛篤麿の思想形成に無視できない影響を与えました。近衛篤麿は日本一の貴族の家庭に生まれ、小さい時から漢学の教養を身に付けました。しかし、体があまり丈夫ではなかったのでずっと独学をし、後に留学しました。外国留学は、彼の人生に貴重な経験を与えたばかりではなく、その後の人生を決めた意味さえ持っていました。欧米でよ

く中国人が欧米人から虐められる場面に遭遇したからこそ、彼は中国人を侮辱する日本人の横暴を許さない気持ちを持つようになったでしょう。いくら日本の貴族とはいえ、いくら日本が強いとはいえ、欧米に行けばいろんなことを勉強できる、いろんなことを考えたと思います。彼のその後の仕事を見ても分かるように、非常に平民的な一面があるのではないかと思います。彼は官僚が嫌い。学者が嫌い。政治家も嫌いといって率直にいろんなことを見ていました。私は決して近衛篤麿のプラスの一面ばかり言うつもりはありません。ただ、彼の対アジア問題の認識について、彼の内面世界に説明を求めるべきだと私は思います。人間近衛の成長過程の様々な経験と変化を知る必要があると思うわけです。

近衛篤麿の主張するアジア主義には、人種的に日本、中国、朝鮮は同じ祖先を共有することと、および列強に蚕食されつつあった中国に対する憐憫の情と列強のパワー・ポリディクスの論理に対する義憤という、2つの重要な内容があると山本茂樹先生は指摘なさっています。確かにそう見てもよろしいかと思います。明治18年4月19日、横浜で仏船「ボリガ」号に乗船し、オーストリアへ出発した近衛は、4月24日の渡航日誌に以下のようなことを書きました。「暁前『ピスカドール』（澎湖島）に着きぬ。同島は支那内地と台湾との間にある一島にして平常は碇泊せぬところなれとも清仏戦争の後なれば負傷人抔を本国に送らんために仏船は必ず之を寄泊するなりと云ふ。（中略）而して已に仏国旗の所々に翻るを見る。已に碧眼の占むるところなりしや知る可し。愍れむべき哉。然れとも我国も隣国の地漸次に西人の蚕食するところとなる。何ぞ此れ之を対岸の火視して可ならんや。唇亡歯寒の喩鑑みるへきなり」。恐らく、貴族の一員である近衛にはそういう留学期間中の体験などがあったからこそ、日本に戻ってきて足尾銅山の被害者に同情したり、困難に直面している朝鮮留学生にも援助の手を差し伸べたと思われます。留学や独学をしたりして、早くお父さんを亡くして祖父と一緒に暮らした経験があった中で、普通の貴族階級と違う一面を持っていたのではないかと私は思います。それから資料を見る限り、彼のアジア問題へ関わりを持ったきっかけは朝鮮問題ではないかと思います。日記には朝鮮留学生との付き合いに関する記述がかなり残されている。それから荒尾精の影響もあったでしょう。荒尾精に関しては、あらためて説明するまでもありませんが、軍人であり実業界に入ってから日清貿易研究所を作り、日中経済関係で先駆けの人物として近衛からの信頼も非常に厚かったわけです。さらに彼は天皇から非常に可愛がられて、まず欧州駐在の大使になると期待され、それから総理大臣になるともいわれたらしいです。

上述の背景こそが、近衛篤麿のアジア問題への関心、もしくは彼が「同人種同盟」および中国問題研究の必要性を提起した原点となったのであります。近衛がアジア問題を考える際に、一番重視しているのはアジア諸民族の対等関係であり、対等意識と関係を持つことこそ、同人種同盟の基本であり、前提であると私は理解しております。日本はいくら戦勝したとはいえ、中国人、朝鮮人を蔑視してはいけない、日中関係も決して短い尺度で計るものではないということを彼は言いたかったのではないかと思います。そういう意味で、近衛篤麿と中国との関係の原点はまさにここにあるといわなければなりません。要するに近衛篤麿の登場により、日本の対中国関係には第4のグループが出現し、またその第4グループの形成と活動が、近代日中関係の重要な一側面を為していたことはまぎれもない事実であります。

では、次に近衛篤麿宛に出された清末の中国人書簡を手がかりに、近衛と清末中国との関係を考えて見たいと思います。京都の陽明文庫に保管されている近衛篤麿関係資料の中に、60名ぐらいの中国人の約100通の書簡があります。書簡は近衛と中国との関係を知る第一級の史料でしたが、

これまでの研究はその内容についての分析を行っておりませんでした。十数年前に私は書簡の整理から始まり、その後、原書房から『近衛篤麿と清末要人——近衛篤麿宛来簡集』と対する本が出版されました。これらの書簡を分類すれば、①清末改良派、②南方有力者、③清政府要人と外交官、および④留学生その他の、4つのグループに分けることができます。書簡は近衛篤麿とこれらの人達との関係を反映し、彼らの間にどのような交流があったかを知るよい材料であります。書簡を通して、今まで知られていない事実を発見することができましたし、非常に興味深いものであります。

清末改良派とは、康有為・梁啓超・汪康年・王照らのことです。書簡を見ますと、近衛は中国の状況をどう見ているのか、また日本と中国との関係をどう思い、何を求めているかが分かるような気がいたします。中国は改革しなくてはいけません。中国が立ち遅れたのは旧習に甘んじて全く新しいものに興味がなかったせいだと近衛は批判していました。彼は日本においても同じことを主張し、いくつかの領域で大改革を行いました。例えば明治28年3月、学習院院長に就任した後、彼は華族子弟の堕落に心を痛め、慣例であった卒業生の陸海軍将校になる伝統を改め、「学習院制度改革意見」を作成し、貴族外交官を養成しようとしました。天皇から「早く欧米に行きなさい」という言葉が高田早稲田大学総長を通して彼に伝えられたとき、「いや、今すぐは行けない。私は学習院の改革の途中だから、もう少し時間が欲しい」と断ったほどの情熱がありました。彼は小さい時から改革に熱心だった。11歳でお父さんが亡くなったとき、家長になった途端、彼は家政を改革したわけです。そのため、彼は中国の改革派に非常に関心があり、同情もしていました。康有為とは何回も会って中国問題について意見交換し、理解を示していました。日中同盟を主張した近衛に対して康有為らは非常に感心し、「ぜひ助けてください」と頻りに頼んでいました。梁啓超・康有為から「西太后をやっつけるには光緒帝を助ける必要があるのだ。光緒帝さえ助ければ中国は大丈夫だ」といってきたことについて、近衛篤麿は「ほんとかな、と思った」というようなことを日記に残しております。つまり「皇帝を一人助ければ万事うまくいくのか、そんなはずはない」ということをいいたかったのでしょう。

康有為、梁啓超、王照の書簡と筆談の内容は、主に戊戌変法を説明しながら光緒皇帝の救援と中国改革の支援を日本に求めたものです。これらの史料は、変法失敗後の康・梁らの心情を表すばかりではなく、日本亡命を援助した近衛に感謝の意を示すと同時に中国の改革を推進し、西太后らの保守勢力を打ち倒すために日本からの協力を強く期待するところにあります。康有為らの要望に対し、近衛は「余は今春来貴皇帝の大いに俊才を召して、各般の改革を断行せらるるの報に接するや、余は一喜一憂したり。何の為に喜びしやぞ、いうまでもなく貴国の開明進歩に向ひしをもってなり。何の為に憂ひしぞ、其の改革の余りに急激に失して蹉跌するなきかをおそれたればなり」と表明し、急激な改革は望ましくないと指摘しました。そして近衛は「我国の維新は決して明治の前両、三年間の間になされしにはあらず、其来るや久し。其の間幾多の人命を犠牲し、各種の変遷を経過したるの結果なり」と、日本の明治維新が幕末以来、長期にわたる社会的な準備があったことを康有為らに説明しました。19世紀末にアジアの将来を考える際、近衛は日中同盟を主張しながらも、中国での性急な改革に反対したわけです。

日中関係について康有為、梁啓超らはまず地勢学と文化の視点に基づいて両国は地理的に近く、風俗も教化も近いものがあり、そして兄弟唇歯、同文同種であることを確認し、国際関係の視点から共通の敵であるロシアを拒否し、両国が輔車の勢いをつくるべきだと繰り返し強調しました。当時は多くの中国有識者が地理や文化や人種の面から両国関係を考えていましたが、日中が連合して

ロシアに対抗するという国際的見地による発想は少なかったのです。無論このことは、義和団事件によって中国をめぐる国際情勢が大きく変動したことと無縁ではなかったのです。しかし後述するように、日清戦争の戦勝国の日本と連合することに対して大勢の中国有識者がかなり抵抗したのも事実です。そのほかに、近衛は康有為の中国脱出への手助け、および日本の資金援助や梁啓超が『清議報』との関係を断つべきだという問題に関わりをもっていたことも、これらの史料から伺うことができます。

これらの書簡は康有為、梁啓超の日本亡命中の活動に対し、近衛が果たした役割を裏付ける史料として注目すべきです。康有為の領収書から分かるように、日本サイドは近衛を通じて亡命者の康・梁らに経済的な援助を提供していました。そして近衛と康・梁との数回の会談に示されたように、近衛は康有為、梁啓超の政治活動について助言しただけでなく、かなり具体的に中国改革の漸進論を勧告しました。更に『日記』の記述と合わせて検討すれば、近衛こそ康有為に米国行きの決断を促した人物ではないかと考えられます。康有為は長い間、自分を日本から強制的に追放した日本政府の政策を恨みましたが、近衛に対して終始尊敬し、感謝し、シンガポールに渡ってからも長女の書いた絵を近衛に送ったりしました。後年、彼は来日の際、以前の恩誼を感謝し、近衛の墓前に碑を建てて追憶の意を表しました。梁啓超も汪康年もずっと最後まで近衛篤麿を尊敬し、信頼していました。要するに改良派から見れば、近衛篤麿は中国事情をよく知り、彼らの改革理念をよく理解し、時には金銭面の支援をしてくれた、信頼できる日本の政治家だということです。

近衛篤麿の優れたところは非常に柔軟性があることです。それは彼がいろんな中国人グループと友好的に付き合っていたことを見ればよく分かります。康有為、梁啓超、汪康年らと交流を持ちながら、清朝の地方実力者とも非常に親しい付き合いをしていました。ここでいう南方有力者とは、中国南方地域で実力をもつ人たちのことです。近衛はかなり早い時期から、清国の中央政府と区別して「南方有力者」「北方有力者」という概念を使って、中国問題を分析しました。ここで南方有力者とはなにかについて、もう少し説明しておきましょう。近衛は、1899年10月1日、世界旅行の途にシンガポールに到着しました。横浜にある華僑学校の大同学校資金募集のため当地に滞在している徐勤が、当地の華僑と協議して近衛の歓迎会を開きたいという要望に対し、近衛は「……是より北京に赴かんとするに、盛んに広東人の歓迎を受けることは、今日の状況に於いてかえって迷惑」という理由で断りました。ここで近衛は、広東人を北京に反対する勢力だと考えていたのでしょう。しかし史料に示されたように、南方には湖北の張之洞のような有力者もいたし、劉坤一のような有力者もいました。やや単純に解釈にしてしまえば近衛の中国認識には、北方対南方、中央対地方というような構図があったに違いありません。有名な「同人種同盟－附支那問題研究の必要」という論文の中で、中国から帰国したばかりの某氏の話を引用した形で、近衛は初めて「北京政府」や「北京以外の有力者」という言葉を使用しました。近衛は「北京政府は依然頑冥不霊にして尊大倨傲も往日と異ならず、啻に敗戦に懲りて、文武の制度を改革するの意なきのみならず、中国主義の旧夢尚ほ醒めずして、復た社稷の安危を顧みざるに似たり」と語っていました。それに対し「北京以外の有力者は窃かに三国同盟の陰謀を悟りて、…北京政府が一も二もなく露国の要求に応ぜむとするの傾向を憂ふるもの少なからず。彼の張之洞の如きは最も之れを憂ふるものの一人」であると、張之洞の名前を挙げて評価しました。ここで注目したいのは、近衛が1898年の時点ですでに「北京政府」を保守、旧勢力と判断し、新生の改革中堅を「北京以外の有力者」に求めたことである。換言すれば、即ち近衛にとって「北京政府」

と「地方有力者」とは、単なる地域の概念というより、寧ろ一定の政治的な価値判断によるものだと理解すべきでしょう。極端な言い方かもしれませんが、要するに近衛にとって、中央対地方とは結局、保守対改革の代名詞に過ぎなかったのです。その後、近衛の公的な発言や文章には、北京政府と区別して、時に「中央アジアにおける有力者」といい、時に「南方諸豪」「南方有力者」といい、時に「支那有力者」というような用語が枚挙にいとないくらい頻繁に登場していました。同様の意味で『日記』には「北清」に対し、「長江一帯」あるいは「南清」という言い方や、そして張之洞、劉坤一などについて「南方有力者」と呼んでいたことで、西太后を始めとする清政府と区別しようとしたのだろうと思われます。

その近衛は終始「南方有力者」との関係を重視していました。それには以下のような理由があったと考えられます。第1に東亜同文会は主として中国南方を拠点に活動し、近衛個人のネットワークの主要メンバーも常に長江を中心に日本の対中経済活動を推進したり、中国関係の情報収集に努めたりしていました。第2に近衛をめぐる中国人の中で南方出身者が極めて多かったこと。というのは1899年、近衛が世界旅行の最終地である中国を訪れ、中国南方都市の広東、武漢、南京、杭州、上海、蘇州を回って、相当の数の南方有力者と知り合ったからです。第3に経済的な利害関係です。1900年近衛は「対清談」の中で次のように指摘しました。即ち「南清の揚子江一帯の清国官民と我官民との関係は、和気靄然として握手輯睦して通商貿易を営むでいるのである。然るに一朝宣戦を布告すれば、支那全部の通商を杜絶して我官民は悉く引き上げねばならぬことになる。今北清一部の騒擾ですら紡績其他の事業に大打撃を蒙けて居るのであるから、此上南清まで禍乱中に包まれたならば、実に我国家経済の上に由々敷き影響を来すのである」と。書簡は、近衛と主要な「南方有力者」との関係を反映したものであります。彼は、南方有力者との交流のなかで、劉坤一とはかなり意気投合していたようで、劉坤一の書簡が一番多いのも納得できます。つまり、1899年近衛の訪中から劉坤一が逝去した1902年までのわずか4年間の間に、劉坤一から12通も書簡が寄せられ、その数が近衛に宛てた中国人書簡の1割以上を占めていることからも、両者の関係が極めて緊密だったことを物語っています。

いうまでもなく、近衛が劉坤一とこれほど親しくなったのは、次のような事情と全く無縁ではありませんでした。まず、近衛は初対面ですでに劉坤一に好感をもっていたと伝えられています。1899年10月29日、劉坤一は南京に来訪した近衛を迎え、白岩竜平の通訳で東アジア情勢や、特に日中関係について様々な意見を交わしました。近衛の東アジア問題に関する意見を聞いた劉坤一は、「中国の盛衰は即ち我が邦に密接の関係をもっている」という近衛の持論に「大いに喜び、正に貴説の如し、到底日清は協同して事を為さざるべからず」といいました。二人はまるで旧知のように琉球問題から現在の情勢まで率直な意見を交換し、両国関係をめぐる国際情勢とその対応策に多くの共通点を見出し、今後の協力を改めて確認したと伝えられています。数日後、武昌で近衛は張之洞と会談しましたが、それを日記に「とにかく劉坤一と比して其の見識の下ること数なる明らかなり」と言う感想を記していました。即ち、63歳の張之洞に較べて69歳の劉坤一の人柄が優れている上、卓越の見識をもっている、尊敬できる政治家であると近衛は判断したのであります。

そのためか次に、近衛が会長を務めていた東亜同文会は劉坤一を対中国工作のもっとも重要な対象と考え、終始劉坤一との関係を大切にしていました。1900年6月30日、東亜同文会では、劉坤一を対中工作の一番重要な対象者と考えるべきだという議論が交わされましたが、その席上で近衛が「又我参謀本部は、中央支那において張之洞との関係は甚親密にして、張の昨今の動作はいちい

ち我参謀本部の方針に遵ふものの如し。然るに劉坤一には左迄の関係なく、手の付け難き有り様にて、寧ろ余の交際最も深き位なれば同人に対しては同文会の手によるの外なしとの考えもある模様なり」と発言したことも、日記に残してあります。このような経緯で、近衛は積極的に劉坤一との友情を深め、二人の文通もますます頻繁になっていったのではないかと推測できます。

張之洞は、近代中国人の日本留学を推進したうえで、最も重要な役割を果たした人物の一人だったといわれています。1899年、矢野文雄駐中国日本公使は200名の中国学生を日本に留学させ、その経費の援助をすると言明しました。それを受けて、湖広総督の張之洞は湖北から100名、湖南から50名の学生を選抜し、農業、工業、工学などを勉強させるために日本に派遣しました。これは、湖北省、湖南省における大量の日本留学のはじまりであった。張之洞は『勧学篇』の中で新式学校を普及するために、新しい教育を受けた新式教員が必要であるという視点から、さらなる大量の遊（留）学生を日本に派遣すべきだと主張しました。彼は「今日の人材育成と強国の道を論ずるには、遊学と出国に多くの人を派遣することは第一重要である」と認識し、全国に呼びかけました。統計によれば、19世紀90年代から20世紀の初めにかけて、湖北省から数千人以上の留学生が日本に派遣されました。もちろん、数のうえで日本への留学生を一番多く派遣した省であります。

張之洞の孫張厚琨の日本留学に関するものが2通あります。この2通の書簡を検討する際、我々は、まず最愛の孫張厚琨を日本に留学させたことを通じて、張之洞が日本の教育を極めて高く評価していた事実を改めて確認できたのです。そして、張之洞が中国青年に日本留学を奨励した『学問の勧め』を発表したとともに、自分の孫まで日本に留学させたことは、中国人の日本留学を促進する役割を果たしたと評価できます。確かに張之洞の日本留学奨励と孫を日本に留学させたことが、当時の中国社会でどのくらいの衝撃を与えたかは調べようがありませんが、しかし後述する清朝の貴族子弟の日本留学に、張之洞のこのような行動は少なからぬ影響を与えたのは事実です。さらに書簡を通して、張之洞は日本を孫の留学地と指定したばかりでなく、孫が日本で勉強すべき科目まで自ら選んだ事実も知ることができます。残念ながら、張厚琨の日本留学は最終的に悲劇で終わりました。だが彼は学習院大学に入った中国人留学生の第一号として、中国人の日本留学史に歴史的遺産を残してくれたといえるでしょう。

このような日本留学のブームと共に、清末中国人の日本視察は強い勢いで展開されていました。これはほかでもなく自強を求め、中国を改革し再建しようとする時代の産物でありました。張之洞は第一回の日本視察団を送り出しました。最近の研究によれば、1898年から1904年までの清末中国の対日視察は43回にものぼり、そのなかで張之洞に派遣された代表団と個人だけでも13件あり、人数も全体の約半分を占めていました。要するに、張之洞は地方の一有力者として、19世紀の終わりから20世紀の始めにかけて日本へ留学生や視察団を派遣したりするような形で、常に積極的に日本に学ぼうとしたわけです。

いうまでもなく、こうして日本を中国近代化のモデルとした背景には、多くの中国人の有識者が日清戦争の教訓および明治維新に対する高い評価に由来するものであったのでしょう。ところが、中国においてこのように日本が評価されるように至ったのは、決して中国人の有力者に対する日本側の意図的な親日工作とは無関係ではありませんでした。実際張之洞はその典型的な例です。通説では、1898年1月に武昌に赴いた日本参謀本部の神尾光臣らの工作によって張之洞は対日強硬論者から親日へと変身したといわれます。近衛宛の張之洞書簡は、寧ろ張之洞の対日認識が次第に変化する過程に近衛サイドが存在することを提示し、具体的な交流の事実を明らかにするところに

大きな意味をもっています。言い替えれば、なぜ張之洞の対日認識が大きく変化したのか、その謎を解くカギは、張之洞書簡、特に書簡の背後に隠れている近衛と張之洞との関係にあると思われます。その意味で書簡を手がかりに、張之洞の対日観の変化過程を考察し、さらに彼を代表とする清末「南方有力者」の親日化の要因を検討することも可能でしょう。これらの課題は別の機会に検討しますが、近衛と張之洞との関係に限っていえば、1898年12月に近衛は張之洞に派遣された湖北武備学堂の日本視察団一行を接待し、自ら国会と学習院の見学を案内し、その制度および運営について詳細に説明しました。それ以来、近衛は中国から来た日本視察団、特に湖北からの視察団に対して常に便宜をはかり、時間の許す限り必ず会って話をしたり、関係者を紹介したりご馳走したりしました。近衛は清末中国の日本視察を促進するために、日本側の受け入れ体制を整備した功労者であったことに間違いありません。

「南方有力者」は実に錚々たる顔ぶれでした。ここに登場した湖広総督の張之洞から両江総督の劉坤一、上海道台の余聯、湖南巡撫の趙爾巽、両広総督の岑春煊、閩浙総督の李興鋭、四川総督の奎俊の七人は、いずれも「南方有力者」の代表であり、「南方有力者」の全員が集合したといってもいいほどです。これは近衛がいかに幅広く「南方有力者」と付き合っていたか物語っています。そして、近衛が積極的に「南方有力者」との接触を計り、日本との関係を良くしようという意図が趙爾巽、李興鋭、奎俊書簡から窺えます。また近衛が最初に康有為、梁啓超らの亡命者と交際し、次に「南方有力者」を中心に、対中関係を展開していったことは、頗る特殊なケースといわなければなりません。こうして彼は最初から地方に注目し、中国南方という具体的な地域に深く入り込んだことになります。要するに地方を重視する、或いは南方を重視する近衛流の中国政策は、当時は客観的かつ現実的でありました。結果的には近衛の対「南方有力者」政策は、この地域において日本の影響力を増大し、いわゆる「南方有力者」の中で多くの知日派と親日派を養成するに至ったのです。例えば、張之洞も劉坤一もその代表でした。全体的に見れば日本側のこのような影響のもとで、清末の日本留学や日本視察は殆ど湖北、湖南、四川、広東、福建、上海、南京などの「南方」地域を中心に行われていたことは、動かざる歴史的な事実だったといえましょう。

清朝の要人と外交官は第3グループに属しております。その中に西太后の側近は日本に関心を持って、何らかの関係に頼って来日し東京で近衛篤麿と会ったり、近衛から書簡をもらったりした例もありました。そして袁世凱という人物、後に中華民国の大総統になりましたが、当時においてもなかなかの実力者でしたけれども、彼は近衛篤麿と実際に会ったことはありませんでした。しかし近衛から書簡をもらったのです。近衛書簡の内容は、中国の改革に関する助言です。近衛篤麿から手紙をもらった袁世凱は非常に感激していました。袁世凱でさえも近衛篤麿との関係を重視していたことを彼の書簡は語っていました。その他に恭親王とか粛親王とか多くの清朝政府の満州族実力者も自分の子供を東京に送り、日本と特殊な関係を結びたいために近衛に接近しました。あるいは近衛のほうで自らこれらの清朝政府要人のために便宜を図ったりしました。そんなことで清朝の要人はそれぞれの思惑で近衛篤麿と交流し、文通を続けていました。書簡から見れば彼等は中国をどうすべきかと近衛からアドバイスを頂き、そして近衛の助言に返答もしました。このことは、当時の中国ではブームとなっていた日本視察よりも遥かに深いところでの日中連繋でありました。特に第3グループの人達の中国政治における立場を考えれば、彼らの対日認識は直接清国と日本との関係に影響を与えたはずです。これらの清末要人が近衛篤麿とこれほど密接な関係を有すること自体は、当時の清国上層部が如何に日本との関係を

重視していたのかを如実に物語っているといえましょう。言い換えれば、中国側にとって近衛篤麿から発信した彼の東アジア理念と中国に対する好意は、日本政治社会における日中友好の象徴として映ったものでした。そういう意味で、近衛篤麿は清末の日中理解と日中協力の流れを作っていた存在だったといえましょう。清国要人の書簡は近衛の中国人脈の一側面を反映していました。また近衛は「南方有力者」との関係を維持しながら、しきりに清国政府に友好親善の意向を伝えようとしました。つまり近衛は、直接清国要人に手紙を出すこと、自ら訪日中の清国要人を接待すること、さらに清国要人の子弟の留学を受け入れるなどがすべて対中工作の一環だと考えたでしょう。書簡が出された時期から見れば、ちょうど近衛の対中認識の変化する時期です。つまり、従来「南方有力者」を重要視する近衛がこれほど多数の清国要人に書簡を送ったり、様々な形で付き合ったりしたことは、彼の対中活動の重点がすでに地方政府から中央政府へと移行し始めたことを反映していると指摘できると思います。

内容ですが「南方有力者」の書簡に比べると、清国要人の書簡は、少なくとも3つの特徴があります。①近衛書簡に対する返書が多いこと。②近衛への礼状も少なくないこと。③日本留学に関する清国要人の子弟学校の受け入れや宿泊先の斡旋などに関する依頼状も結構あったことです。これは何を意味していたのでしょうか。確かに12名の清国要人から寄せられた書簡は、清国の中央政府においても近衛の知名度と影響力が甚だ大きいことを物語っています。しかし、これはあくまでも近衛が計画的に清国要人と接触しようと努力した結果だったといってもいいでしょう。書簡の特徴に示されたように、近衛は、那桐、喀喇沁王、毓朗、肅親王とは個人的なつきあいがありましたが、恭親王、王文韶、袁世凱とはごく普通の関係に留まっていました。従って1904年に近衛が逝去したことを考えれば、これら「清国要人」に対する近衛の影響は、当時より寧ろその後に現れた親日の動きに与えたのではないかと思います。つまり民国期において袁世凱の親日政策、および第一次・第二次満蒙独立運動の思想背景に近衛の「日清同盟」という主張の影響はないとはいえないでしょう。

第4番目のグループは留学生とその他ですが、近衛が日本社会に高い地位にいる人物なので、留学生との付き合いも主に張之洞とかそういう人達の子供としかできなかったわけです。その人達からの礼状とか、ちょっと休暇をもらいたいという程度の手紙です。それから近衛を尊敬する、全く知らない人からの手紙もあります。東京にいる近衛のやり方、中国政策に反対する学生からの手紙も頗る面白かったです。つまり近衛が主張しているのは中国の要人たちとの連携ばかりです。これらの子弟をいくら助けてもどうしようもない、そんなことをやめたほうがいいとかという意見でありました。それに対し、近衛が大変けしからんというコメントを付けました。まあ要は当時の日中関係には様々な事件、様々なグループがあったことの証であります。それは、当時の中国における近衛篤麿の知名度の高さを現したものといっても過言ではないでしょう。

以上は清末要人書簡の概要です。近衛日記の第6巻ですが資料関係に収集されている8編か9編の中国資料の内容は、殆ど経済関係です。近衛がこれほど経済問題に関心を持っていたことに驚きました。日本は島国であり、日本が発展するには農業より工業だと、そして工業の発展には市場が必要です。原料も必要です。製品を遠く欧米に持っていくわけにはいかないから、中国との関係を大事にしなくてはいけません。そういうことを近衛篤麿は見ていたわけです。次に彼の周辺にいた中国問題に携わっている日本人に簡単に触れたいと思います。

最初は荒尾精です。釈迦に説法になるかも知れませんが、荒尾精に関していえることが3つほど

あります。まず彼は経済利権を重視し早い時点で日清提携を主張したこと。そして中国との商売の中で中国研究と人材育成の必要性を認識していたこと、さらに日清貿易研究所を作ったり、日清商品陳列所を作ったりしたことであります。近衛篤麿は荒尾と深い関係があり、ある意味では荒尾の対中認識を受けていたのです。

2人目は白岩龍平です。東京学芸大学名誉教授の中村義先生は白岩龍平に関して『経済アジア主義者』という立派な本を出されました。龍平は日清貿易研究所の1期生で、卒業後、実業社会に入りました。彼は、経済アジア主義者の中で代表的な人物の1人ではなかったかと思います。また近代日中関係の中で、経済人としては非常に珍しい存在だったのです。龍平は、近衛に信頼されている中国専門家であり、中国情報の最大な提供者でもあったのです。龍平も上海・蘇州・杭州、長沙などでの仕事を通して得た情報を随時に近衛に報告し、仕事に困ったときにいつも近衛の助けをもらったりしていました。近衛の対中関係の様々な場面に龍平は登場していましたし、近衛の中国との関係を考える上で抜きにして語ることのできない人物だったといっても過言ではありません。どちらかというと、龍平は日本の対中国関係の中で穏健派に属しており、近衛の逝去後、彼は東亜同文会の理事長になり、日華実業協会の実質的な先任者でもありました。

3人目は内藤湖南です。内藤湖南は旧京都帝国大学の若い中国研究者で、のちに日本における中国研究の権威となった学者です。湖南は従来のいわゆる支那通に不満を持っていたことから近衛と意気投合しました。彼は九州の人が最初に中国問題に関わったのは不幸であったといいました。というのは九州男児は理想が高く元気がありました。しかし理想ばかり燃えて多くの報酬を望まない、実務に向かないので、対中関係を推進することに不向きからであります。むしろ収入のある常識人で、中国文化に教養をもつ人に期待をよせるべきであります。湖南は近衛と親交があり、近衛日記に湖南が数回ほど登場しました。1回目は湖南が東京で近衛を訪問し、中国問題について議論したことが記されています。近衛が京都に出かけた時に湖南と会った記録が2回目であり、京都から帰京の際わざわざ大阪から見送りに来た湖南の事が記されていますが、これが3回目です。二人の間にどのような会話や意見交換をしていったのか分かりませんが、現存資料では、少なくとも経済に精通する新しい交渉者と中国内陸で活動できる「商売人」を養成すべきだという点で意見が一致していたことが分かります。湖南にある強い現場主義と政策志向は、直接近衛と関連があると指摘できます。湖南は白岩龍平との付き合いがありました。湖南の中国に対する見識は近衛に多くの影響を与えたと考えられます。

最後に奥村五百について若干触れるべきだと思います。奥村は朝鮮問題を通して近衛と関係を持つようになりました。つまり近衛は奥村を通じて朝鮮問題に直接、間接に関わっていたのであります。朝鮮情報の持つ価値を近衛は非常に重視したのではないでしょうか。日本にとって朝鮮問題は、留学生の受け入れや留学生教育、留学生奨学金などがあり、困ったときに奥村が近衛のところに相談に来て、協力と救援を求めていました。日清同盟における朝鮮の位置づけ、さらに外交問題と国内問題との連繋において近衛は朝鮮問題を大切なファクタとして見ていたわけです。

そろそろ話を終えたいと思いますが、近衛篤麿と清末中国を考える時、いくつか忘れてはいけないことがあります。1つは近衛篤麿が残してくれた歴史遺産をどう考えるかという問題があります。次に近代日中関係における近衛の役割と影響をどう評価すべきかという宿題があります。さらに21世紀日中関係へのメッセージとして、我々は近衛篤麿をどう捉えるべきかという課題があります。時間がないので私の考え方を簡単に説明します。歴史遺産にいろいろな側面があるわけで、

第1に近衛篤麿が残した遺産に「地域主義」という大きなキーワードが一番大切ではないかと思います。また東亜同文書院という「非政府組織」(NGO) の雛型を100年前に提起したことも重要であると強調したいのです。第3点は、平等ということです。地域主義にしても「非政府組織」にしても参加者の全員がすべて対等であり、平等である事はなによりも大切なことであります。つまり我々は東アジア共同体構想を考える際、平等でないと何も始まりません。もう1つは理念の問題があります。つまりアジア主義です。アジア主義の歴史に大きな問題があることは事実ですが、過去の間違いを直して連合、連帯、共生というアジア主義の理念を生かすべきであります。最後に21世紀へのメッセージとして私は、相互理解の諸問題、友好と交流が重要であり、それから地球視野の連帯と経済提携を、今こそ我々が真剣に考えなければならないと思います。ご清聴ありがとうございました。

【司会】 李廷江先生ありがとうございました。では今から質疑応答に移らせていただきます。ご質問の際には必ず、ご所属およびお名前をおっしゃっていただくようお願いいたします。なお、ご質問は恐縮ですが簡潔にお願いしたいと思います。ご質問のある方は挙手をお願いいたします。

【質問者】 こんにちは。私は主婦なので所属はないんですけれども。東京都からまいりました。よろしくお願いいたします。先生のご経歴に清華大学ご出身となっておりますが、先生との関係について聞きしたいと思います。

【李】 日本ではよく両親が私を生んで大学が私を育てたといいます。中国でも同じこともいいます。その意味で大学は人間形成の重要な場所だと思います。大学時代で学んだこと、および受けた影響は、その後の人生に計り知れないものがあるのではないかと、今になってからつくづく感じておりますが、具体的に何かといわれると一語で言い表せません。清華大学は、100年ほどの歴史を持つ中国の名門校で、歴史上大勢の優れた人材を養成して来ました。私にとっての母校は、誇りであり、努力の原動力でもあります。初心を忘れずといいますが、そういう気持ちで、時々母校と学生時代のことを思い出しています。

【司会】 はい、では次の方どうぞ。

【質問者】 東亜同文書院大学44期生の幅舘卓哉と申します。昭和17年に中国に渡り、中国を勉強させてもらった者でございます。先生の今までのお話の中で、特に語気を強めておっしゃらなかったんですが、長い時間のご講演の中で先生は「平等」ということを触れられた。私は実例を申し上げます。入管局にまいりました時に、入管局の担当者が私の知人の外国人にどう言ったかというと、「メイ・アイ・ハブ・ユア・ネイム？」という言い方をした。これは中国語で言えば「您貴姓？」。ところが中国、台湾、フィリピンなどのアジアや東南アジアの人を呼ぶ時には「あんた名前何ていうの？」、「你叫什么名字？」。こういうようなわずかなところで差別をしている。我々中国に関心を持ち、かつ中国と仲良くしていかなければならないという思いを持っている人間にとっては非常に不愉快だった。それで敢えて先生にお尋ねしたいんですが、20数年前に日本に初めてお越しになった時、日本人の、先生方に対する対応の仕方で不愉快にお感じになったことがございましょうか。あるとすれば、それに対して先生は今どのようにお感じになっていらっしゃるでしょうか。

【李】 大変大きな問題です。私は非常に幸運で、日本に来て25年になりましたが、いつもいい方に恵まれて、そういうような不愉快な経験が殆どなかったので本当に感謝しています。しかし、日本社会の差別、特にアジア人に対する根強い差別に対して、いつも悲しく思います。これこそ、現代日本社会にある根本的な問題の1つといえます。もちろん中国にも差別問題はあります。黒人に対して、農村の人に対して、地位のある人がそ

うでない人を差別します。そういう差別の社会を見ると非常に悲しくなります。中国から来た留学生としては差別には一番敏感であるわけです。人間の心の貧しさはまさにそこにあるのではないかと。100年前に福沢諭吉先生は「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」といいましたが、21世紀にはいってからも依然として良くはなっておりません。差別問題は、別に日本や中国だけの問題ではありません。結局そこに人間の本質が現れているわけです。

【司会】 ありがとうございました。他にご質問は。はいどうぞ。

【質問者】 愛知県の田原市役所で事務職員をやっております。本日はありがとうございました。学生の頃、満州地域の成り立ちを勉強していて、劉坤一と張之洞は近衛篤麿から中国内地に関する改革の意見を受け入れて、省改革のことを清朝に提議している。そのあたりも含めて当時東亜同文会が清朝に刺激を与えたことをお聞きしたいと思います。

【李】 お答えになるかどうか知りませんが、近衛は張之洞や劉坤一と親交がありました。近衛は物事をはっきり言うタイプで、人と会う時に相手が本当のことを言わないといつも怒ったりしました。研究者の間では、近衛は劉坤一を高く評価し、張之洞をたいした人物ではないと見ている考える向きがあります。しかし、それが事実と違うと私は思います。というのは、中国にも建前と本音があります。張之洞としては、はじめて会った外国人の近衛に本心をそのまま言えなかったわけです。清朝政府の重要な一員として張之洞は外国人である近衛と会ったとき、康有為を批判したり、孫文を批判したりしました。そういう張之洞を見て近衛は非常にがっかりしたわけです。ところが、近衛と会見後、張之洞は劉坤一宛の書簡で近衛公爵と会ったが、初対面で普通の挨拶程度のことしか言わなかったと説明しました。ですから、張之洞は劉坤一よりレベルが低いということは全くの誤解だと私は思います。近衛篤麿の考え方は張之洞に大きな影響を与えたのも事実であります。張之洞は近衛を信頼していたことも事実であります。私が調べた資料では、実は義和団事件のあとに張之洞が1日50通もの書簡を出していました。近衛をはじめ日本の総理大臣、陸軍大臣に協力と支援を要請しました。日本の協力で難局を乗り越えて改革を進めたいという内容であります。

【司会】 では時間の関係であとお一人だけ。はい、お願いいたします。

【質問者】 素晴らしいお話をどうもありがとうございました。私は山田と申しまして、私の祖父が東亜同文書院の15期生でございます。東亜同文書院の同好会である滬友会の会員でほぼ100年前に卒業したことになります。ちょうど先生が21世紀に向けてと言われたので、100年先を考える理念というお話がございましたが、その理念をどういうところに求めるべきだとお考えになりますか。

【李】 私はそれに答える力を持っておりません。しかし私が考えているのは、100年前に近衛が中国を軽蔑する戦勝の日本社会を批判し、日清同盟を提唱していました。日清同盟を実現するために、互いに理解しなければなりません。お互いに知り合うこと、互いに理解する仕組みを作らなければならないことであります。同じアジア人といっても生活環境が違い、考え方が違います。だから理解するにはどうしたらいいかを考えるのが重要です。例えば私は北朝鮮に2回ほど行ったことがあるんですが、日本では北朝鮮についてはどちらかと言うと暗いイメージでマイナスのような存在ですが、中国においても北朝鮮のイメージは決してよくありません。しかし、私は社会制度だけに着目せずそこで生活している人をどう理解するかという気持ちを持つべきではないかと思います。同じ意味で中国社会は今少し豊かになりましたけれども、いろんなレベルで貧富の差があります。同じ中国人でも金持ちと貧乏な人のあいだに理解が

あったかどうかは問題です。こういう平等と理解は、人間社会の永久の課題ではないかと思います。理解し、対話をすれば少しずついい社会になっていくのではないでしょうか。そういう意味では21世紀の課題は、まさに人間尊重と理解交流を考えるべきです。学生時代に中国革命および世界革命という理想に燃えました。今は、日中理解のため、アジア平和と繁栄のために微力ながら尽くしたいと思い、そういう生き方を貫いていこうと思っています。

【司会】 ありがとうございました。まだご質問のある方もいらっしゃるかとは思いますが、時間になりましたので、これをもちまして李廷江先生講演会「近衛篤麿と清末中国」を終わらせていただきます。今一度李廷江先生に盛大な拍手をお送りください。ありがとうございました。皆様お気をつけてお帰りください。